



No.49 / Spring 2023

会 長 滝浦 真人

事務局 〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町 1-8 大阪大学 秦かおり研究室内

事務局連絡先 secretary-at-pragmatics.gr.jp

郵便振替口座 00900-3-130378 口座名:日本語用論学会

ゆうちょ銀行口座 記号・番号:00900 - 130378 日本語用論学会

支店番号:099(店名:〇九九) 当座預金 口座番号:0130378 日本語用論学会

「会員になって論文投稿しよう！」と
(もっと) 思ってもらえる学会になるために
—S/P オンライン化に伴う公開猶予期間の扱いと
即時オープン化の提案について—

会長 滝浦真人

- ▶ 本学会の会誌 S/P は今年度号(S/P 25)より、「公開猶予期間」を廃止し「即時オープン化」することとなりました。以下は、5月28日開催の評議員会にて本件をご審議いただいた際に資料としてお配りした提案の趣旨説明です。評議員会では、満場一致でご承認いただくことができました。

より多くの研究発表機会を会員に提供するという学会の役割についての基本的な考え方を表明した文書としても読めると思い、この際、会員皆さまのお目にかけてご覧いただくのも悪くないかと考えました。

ご一読いただきまして、即時公開論文の掲載を目指して一人でも多くの方にご投稿いただけることを、堀江編集委員長とともども、心よりお待ちしております。

おかげさまで会誌 S/P は、今年度号(S/P 25)からオンライン化されることとなりました。早速の副産物と言うべきか、一般投稿論文の投稿期限を5月末から6月末に延期することが可能となりました。(投稿数が増えてくれることを祈っています!)

もうまもなくその期限がやってきますが、それまでには是非公表しておきたいことがありました。それは、刊行された後のS/P25(とそれ以降の号)について、これまで「刊行後2年間」と設定されていた掲載論文の「公開猶予期間」の扱いをどうするか?という問題で、これが未決でした。

先般、学会としての執行方針を決める「(拡大)常任委員会」で話し合いましたが、予想以上に時間がかかり、その件だけで1時間ほどを費やすこととなりました。じつは、会長の腹案は、

公開猶予期間を設定し、その期間を半年/1年とする

というものでしたが、率直に言って、それが支持されませんでした。公開猶予は会員の権利でもあるとの意見を頂戴していたこともあり、会長としては、それは損なわない方向で考えましたが、委員会での反応は芳しくありませんでした。

出席された全員に近い方が意見を述べられましたが、「会員の権利」に関しては、「最大の権利は、自身の研究を発表できる権利」すなわち「大会での発表を応募できる権利と会誌への投稿ができる権利」であるとの見解が大勢を占めました。「公開猶予」を会員の権利と見た場合には「会員が非会員よりも先に掲載論文を読める権利」であることとなりますが、その見方に一定の理解を示す意見も出された一方で、そうした排他的な「権利」が投稿者にとっても嬉しいことであるとは言えない、との意見も続くこととなりました。非会員でも全くフリーに論文が読めるのであれば、お金を払ってわざわざ会員にな

る必要もないと考え入会してくれない人が増える懸念もあるのではないかとその意見も出されましたが、そもそも現在、掲載論文を早く読みたいから会員になろうと考える(てい)る人がどれだけいるのか?との疑問も呈されることとなりました。

議論が煮詰まるうち、それよりもむしろ、大学院生などまだ会員でない人が、会員になって発表応募したい/論文投稿したいと思うような学会であること、会員になったら楽しそう/いいことありそうだと思ってもらえるような学会であることこそが、われわれの目指すべきことではないのか?との考えに収斂していくこととなりました。

そこであらためて「猶予」とは?と考えると、「猶予」=「会員の権利」との考え方自体も、そう確かなものではないかもしれないと思われてきます。英語では‘embargo’という用語になるのですが、これの原義は、海外船籍の軍艦の出港停止措置とのことで、基本の意味として“誰が誰に求めるのか?”と考えると、学会が主体なのではなく、刊行を受け負っている商業出版社が自らの利益を損なうことがないように、“学会に対して一定期間の公開を差し控えるよう求める”というのが定義であると考えられるべきものでしょう。

だとすると、そもそも、オンライン化し刊行主体としての出版社という存在がなくなった S/P にはそうした‘embargo’を「受ける」理由もなくなった、と考えるのが筋であると言った方がいいかもしれません。そうなったとき、要は、“**私たちは誰の方を向くべきなのか?**”ということに尽きるのでは?との認識に立ち至ることとなります。

かくして、常任委員会が出した結論は以下のようになりました。

- ✓ 尊重されるべき最大の会員の権利は、投稿者(著者)が自分の研究成果をいち早くより多くの読者がアクセスできる状態にすることである
- ✓ 会員としての特権という面への配慮も留意すべきではあるが、それは、大会での発表数(応募数)や会誌での掲載数(投稿数)が増えるような取り組みや、事業活動における魅力的な会員サービスの増強などを通して追求されるべきものである
- ✓ そうした点を勘案し、「公開猶予期間」においては廃止することとし、刊行後は「即時オープン化」をすることとする
(公開猶予期間付きの既刊号については、開拓社との契約を遵守する[当然、])

この常任委員会の結論をもって、学会の最高意思決定機関である評議員会へのご提案とさせていただきます。ご審議のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

ご参考までに、「公開猶予期間」をめぐって出された論点を挙げておきます。

○「公開猶予期間」をめぐるとの論点

- ・「公開猶予」は「会員の権利」であって、なくす/短くすることは、会員の権利を損なうことになるのでは?
 - 「学会員」とは誰か? まずもって、掲載論文の著者ではないのか? だとしたら、その人は、非会員には読んでほしくない、と思っているのか? 答えが否であるなら、「会員の権利」とは、掲載論文の著者が、会員/非会員問わず一人でも多くの人にいち早く読んでもらえる可能性、のことではないのか?
- ・学会員でない人もすぐに誰でも読めるなら、わざわざ学会に入らなくてもいいや、と思う人が増えるのではないのか?
 - 掲載論文を「読む」ために学会に入ろうという人がどれだけいるか? 大会で発表したい、論文を投稿したいから学会に入るのでは?
- ・そうすると、その時だけ会員になって、目的を達したら/達せられなかったら退会する、という人が増えるのではないのか?
 - むしろ、そういう人をそれ以上に繋ぎ止められるかどうか、学会としての魅力如何なのではないか?

以上

語用論研究の新潮流 (8)

相互行為言語学 -やりとりの中の言葉と身体

遠藤 智子 (東京大学)

2022年8月のある日、ヘルシンキからタリンに向かうフェリーの中で、久しぶりに会ったフ研究者仲間と話をしていた時のこと。近況報告の中で「学部生相手に語用論入門の授業を初めてやってみたんだけど、グライスとオースティンの話がほとんどになっちゃった。私にとっての語用論と、『語用論入門』で教えるべき内容

にはギャップがあるみたい」と愚痴まじりに言ったところ、“I KNOW EXACTLY what you mean!” とものすごい勢いで同意された。彼女はリトヴァ・ローリーという、ヘルシンキ大を5年以上前に定年退職した言語学者だが、その長いキャリアの中で、今の私がつ葛藤を感じてきたのだろう。

リトヴァと私が採用している研究枠組は相互行為言語学 (Interactional Linguistics) である。相互行為言語学とは、会話分析の手法や考え方を言語研究に取り入れたもので、会話の参加者たちが様々な社会的行為を達成するために言語をどのように用いるのかに関心の中心がある。言語が相互行為を形作り、また同時に相互行為が言語の有様を変えていく、そのダイナミックな関係を捉えることを目的とするため、研究のためにはまず実際の会話を撮影・録音したのち書き起こし、詳細に分析する。

相互行為言語学は、言語学・社会学・人類学の3領域が交差する領域である。会話分析は1970年代に本格的に創始され、1980年代に大きな進展をみた。文法に関わる初期の会話分析的研究が1996年に論文集 *Interaction and Grammar* として結実すると、相互行為の中の文法を研究する潮流が形作られていった。2000年代には様々な言語の分析が収録された論文集がいくつも出版され、2015年にアメリカ英語の反応ターンに関する包括的研究の *Grammar in Everyday Conversation*、2017年に概説書の *Interactional Linguistics* が出版されたことで、相互行為言語学の道具立てが整理された。

その草創期から相互行為言語学を牽引してきた言語学者は、1980年代に談話機能主義言語学において中心的な役割をしたサンドラ・トンブソンである。談話機能主義言語学が扱ったトピックの多くは他動性や項構造、品詞等、いわば文法の根幹となる概念の談話的基盤であり、統語的地位や意味役割についての考察が談話のデータに基づいて行われた (Cumming et al., 2012, 大谷・中山, 2020)。これに対し、相互行為言語学では相互行為の資源としての文法のはたらきを扱う。例えば、日本語の助詞は一般的には名詞に後接して用いられるものとされるが、会話の流れの中では、発話の開始部に出ることもある。林(2005)は助詞で始まる発話を観察し、そのはたらきのひとつは、一旦挿入された連鎖で行った確認要求や記憶探し等の補足的サイド・アクティビティーから語りのメイン・アクティビティーに戻るといふ、複数のアクティビティーの橋渡しであると論じた。このように、従来は文の組み立てや意味上の機能につ

いてのみ論じられてきた要素が実際のやりとりにおいてなす相互行為上の働きについて、様々な言語において研究が進められている。

会話において用いられる言葉は、導管メタファーやコードモデルに象徴される言語観のように「考えを言葉に詰め込んで送り、送られた言葉から考えを取り出す」という性質のものではない。言葉は、ごく短い一部が発されただけでも相手の反応を生み出しうるものであり、会話の参加者はまるでダンスのように相手の反応に敏感に対応しながら協働的に発話を組み立てていく。また、近年は、マルチモーダル分析、すなわち、身体や環境等、言葉以外の要素を分析に取り入れることが標準的になっている

(Yasui et al., forthcoming)。実際の対面のやりとりにおいてはあらゆるものが相互行為のための資源として用いられ、態度表明等においてはプロソディや表情、ジェスチャー等のパラ言語的要素が言葉よりも大きな働きをすることを考えると、言葉とその表す意味だけを研究対象としているのでは到底足りないのである。

初学者向けシリーズの一冊である Clark (2022) でも度々強調されているが、語用論の扱う対象は、想像された発話の意味とその可能な解釈から、実時間の中で生起する相互行為へと広がってきている。研究史の中で相対的に新しい位置にあるのは、研究のための技術や理論的枠組みがようやく整ってきたからであり、相互行為言語学が1990年代から成し遂げ、現在も進んでいる研究は、これからの語用論にとって最も重要な方向性のひとつである。今後また入門の授業を担当する際には、相互行為研究の面白さを学部生たちにも伝えていきたいと思う。

参考文献

- Clark, Billy. 2022. *Pragmatics: the basics*. Routledge.
- Couper-Kuhlen, Elizabeth, and Margret Selting. 2017. *Interactional Linguistics: Studying Language in Social Interaction*. Cambridge University Press.
- Cumming, Susanna, Tsuyoshi Ono & Ritva Laury. 2011. Discourse, Grammar and Interaction. In Teun A. van Dijk (ed.) *Discourse as Structure and Process: Discourse Studies: A multidisciplinary Introduction*, second edition. pp.8-36. SAGE.
- 林誠. 2005. 「文」内におけるインターアクション — 日本語助詞の相互行為上の役割をめぐって —. 伝康晴・串田秀也・定延利之 (編) 『「活動」としての文と発話』 pp.1-26. ひつじ書房.

Ochs, Elinor, Emanuel A. Schegloff, and Sandra A. Thompson. (eds.) 1996. *Interaction and Grammar*. Cambridge University Press.

大谷直輝・中山俊秀. 2020. 「認知言語学と談話機能言語学」. 中山・大谷(編)『認知言語学と談話機能主義の有機的接点: 用法基盤モデルに基づく新展開』pp.27-48. ひつじ書房.

Thompson, Sandra A., Barbara A. Fox and Elizabeth Couper-Kuhlen. 2015. *Grammar in Everyday Talk: Building Responsive Actions*. Cambridge University Press.

Yasui, Eiko, Hideyuki Sugiura, and Tomoko Endo. Forthcoming. Multimodal analysis. In Kazuko Matsumoto, Heiko Narrog, John Maher and Mie Hiramoto, (eds.), *The Oxford Handbook of the Japanese Language*. Oxford University Press.

* * PSJ26 (第26回大会) ご案内 * *

日本語用論学会第26回大会は、以下のとおり、創価大学(東京都八王子市)での開催を予定しております。

◆日時: 12月9日(土)、10日(日)

◆場所: 創価大学

〒192-8577 東京都八王子市丹木町1-236

(アクセスについてはP.6をご参照ください。)

★開催方法変更時の案内について

社会情勢の影響により、オンライン開催に変更する場合は、学会公式ウェブサイトと会員メーリングリストで告知します。

◆主なプログラム

大まかなプログラムは以下を予定しております。タイムスケジュールや変更点など、詳細は追って学会公式ウェブサイトと会員メーリングリストでお知らせいたします。

【大会テーマ】

「日本語教育のために語用論ができること」

≪12月9日(土)≫

☆ワークショップ

☆ポスター発表

☆研究発表

☆会員総会

☆基調講演

☆懇親会

【基調講演】

≪12月10日(日)≫

☆研究発表

☆語用論茶寮

☆招待講演

☆シンポジウム

「日本語学習者による日本語の理解過程—理解困難点と推測技術—」
野田尚史(日本大学)

【招待講演】

中国語用論学会(CPrA)より招聘予定

◆発表募集

発表形態は、口頭発表、ポスター発表、ワークショップの3種類です(発表言語は日本語ないしは英語)。各スケジュールと応募要項は以下をご覧ください。皆様のご応募をお待ちしております。

- 投稿締め切り: 2023年8月19日(土)
- 採否通知: 2023年9月下旬
- 大会発表要旨(Abstract)原稿締切: 2023年10月中旬頃
- 大会発表論文集(Proceedings)原稿締切: 2024年3月31日(日)

◆応募要項

①申し込み資格

口頭発表・ポスター発表の第一発表者、ワークショップの代表者として発表を申し込むには会員である必要があります。なお、ワークショップは司会者を含めて3名以上の団体である必要があります。

②発表テーマ

i 語用論研究と関連するテーマであれば自由。
ii 今大会では日本語教育と語用論の両方に関連するテーマを特に歓迎します。(日本語教育関連発表のセッションを設ける予定)

③発表形態と発表時間

- 1) 口頭発表: 発表25分+質疑応答10分
- 2) ポスター発表: 1時間(掲示時間)
- 3) ワークショップ: 1時間40分

※1. 新型コロナウイルス感染症に関わるやむを得ない事情が生じた場合には、すみやかに大会発表委員会にご相談くださいますようお願いいたします。

※2. 社会状況を鑑みてオンライン開催となる場合もあります。予めご承知おきください。

④発表言語: 日本語または英語

⑤申し込み先

発表の申し込み先は、学会ホームページの会員専用ページ「マイページ」内にあります。この「大会発表応募ページ」は6月下旬頃にオープン

ンする予定です。投稿方法の詳細は後日学会ウェブサイトでお知らせいたします。

⑥申し込み原稿の形式

発表の種類にかかわらず、申し込み原稿はすべて同じ形式です。

用紙サイズ：A4 縦

規定文字数：日本語 2,500 字以内、英語 500 words 以内。日本語の場合は文字数を、英語の場合は word 数を、原稿の末尾に記入してください。

ファイル形式：Microsoft Word 形式 (doc, docx)、PDF 形式(pdf)

- ・氏名と所属は記入しないでください。
- ・発表タイトルを 1 行目に、タイトルの下に 1 行空け、次の行から本文を記入してください。
- ・ワークショップの場合は、発表者全員分の要旨が規定文字数・word 数に収まるようにまとめてください。
- ・文字数と word 数には、例文、表、キャプション、注釈を全て含みます。ただし、図形内のオブジェクトに添えられた文字や参考文献は含みません。日本語原稿の中にアルファベット等の半角文字を含む場合、半角文字 2 文字を 1 字と数えます。
- ・参考文献の書式は『語用論研究』に準じます。
- ・指示された形式やファイルフォーマットに従わずに申し込んだ場合、内容にかかわらず不採用となることがあります。
- ・タイトル(サブタイトルを含む)は、(大会発表委員会、大会総務委員会から依頼する場合を除き)一切変更はできません。採択や発表後に公表される「プログラム」「要旨集」「大会発表論文集(Proceedings)」に掲載されるタイトルは、申込時のタイトルとなります。なお、発表応募時に(「マイページ」内の)「大会発表応募ページ」に記入するタイトルと、ファイルで提出される申し込み原稿内のタイトルが一貫しているか、入念にご確認をお願いいたします。

⑦申し込み原稿の留意事項

申し込み原稿には、表現や構成のわかりやすさと説明の一貫性が求められます。かつ、以下のような点について過不足なく論じる必要があります。

- ・問題となる現象
- ・その現象についての先行研究と問題点
- ・現象の分析に用いるデータ
- ・現象の分析方法

- ・現象の分析結果
- ・分析結果に基づく結論と理論的含意

⑧申し込み制限

一人の会員が発表者として申し込みできるのは、一大会につき 2 件(ワークショップ含む)までです。かつ、第一発表者、または、ワークショップの代表者として申し込みができるのは一大会につき 1 件のみです。

⑨二重投稿の禁止

申し込みにおいては、二重投稿を禁止します。大会発表委員会が二重投稿と認めた場合、その申し込みは受理されません。かつ、次年度の大会においても当該者を発表者に含む申し込みは受理しません。

- ※1. 二重投稿とは、他の学会で既に発表した、もしくは発表を申し込み中である内容、または、既に学術的刊行物に掲載された、もしくは投稿中である論文と極めて類似する内容で申し込むことを指します。
- ※2. 学士論文・修士論文・博士論文は、公表や出版がされていない場合、「学術的刊行物」には含めません。
- ※3. 学会の発表や学術的刊行物の掲載へ応募したものであっても、既に不採択が決定している内容を申し込む場合は、二重投稿に含まれません。

⑩選考結果の通知

選考結果は 9 月下旬に第一発表者、または、ワークショップの代表者宛に通知します。

⑪No Show に対する措置

発表が採択されたにもかかわらず、大会当日に大会発表委員会に無断で発表を行わない場合やポスターの掲示のみで説明を行わない場合は、これらを「No Show」とみなし、学会ウェブサイトにて公表します。ただし、事前、または、当日に(やむをえない場合には事後に)、発表を行えない(行えなかった)合理的な事情の説明がある場合には、「キャンセルされた発表」とします。

◆問い合わせ先

発表申し込みに関するお問い合わせは、下記アドレス宛に 8 月 11 日(金)までにお問い合わせいたします。

E-mail : presentation -at- pragmatics.gr.jp
(大会発表委員長・西田光一宛)

令和5年3月18日(土)に九州大学伊都キャンパスにて、九州大学言語文化研究院と上海外国語大学日本文化経済学院(中国)の共催でオンラインにて開催しました。日本語学習、日本語の助詞、SNSの若者言葉やポライトネスなどについて、日中の研究者および大学院生による計15の口頭発表が行われました。(九州大学 大津隆広)

委員会・事務局より

★『語用論研究』編集委員会より

この度、3年間にわたって『語用論研究』の編集委員長を務められた田中廣明先生の後を受けて、編集委員長を務めさせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。『語用論研究』は今後会員・非会員に関わらず、日本の学術ジャーナルを国際的に発信するプラットフォームである「J-stage」上で即時公開されるオンラインジャーナルとなります。オンライン化に伴い、組版作業等の時間短縮が可能になることから、論文の投稿締め切りも6月末とさせていただきます。

振り返りますと、私が大学院生だった1980年代は、紙版のジャーナルの全盛期でした。『言語研究』(日本言語学会)、『国語学』(後に『日本語の研究』)(国語学会、後に日本語学会)、*English Linguistics* (日本英語学会)など直接会員のもとに郵送される言語学関連学会の学会誌とともに、月刊『言語』(大修館書店)や『英語青年』(研究社)、『日本語学』(明治書院)といった、一般の書店で販売もされており、先端的な研究の特集号やepoch-makingな論考も収録される紙版のジャーナルもあり、活況を呈していました。校正を経て、自分の論文が載った学会誌の掲載号を手にとった時の感激を鮮やかに記憶されている方も多いことと思います。

その後、紙媒体のジャーナルを巡る状況は大きく変わりました。もはや月刊『言語』や『英語青年』はなく、店頭で販売されているジャーナルの数も僅かとなりました。国内でも、『社会言語科学』(社会言語科学学会)の最近の例にもありますように、速報性の重視という観点からオンラインジャーナルに移行する言語学関連の学会が少しずつ増えてきています。私が長年編集に携わっている日本言語科学学会(JSLS)においても、2021年に学会誌*Studies in Language Sciences(SLS)*を、会員への配布と店頭販売という紙版のジャーナルからオンラインジャーナルへの移行を実現させました。経費と速報性の観点からの決断でしたが、その結果、言語科学学会大会での発表を経ない海外からの論文投稿が増えました。

かつての自費出版のジャーナルから、開拓社という、言語学・英語学研究書籍の老舗出版社から刊行される全国誌ジャーナルへの移行を成し遂げられたのも、前委員長の田中先生はもとより、これまで語用論学会の基礎を築き上げられてきた故小泉保先生、故児玉徳美先生、故高原脩先生、澤田治美先生、山梨正明先生、林宅男先生をはじめとする諸先生方のご尽力の賜物です。紙版の『語用論研究』が獲得してきた、オンラインという媒体では代えがたい無形の価値を認めつつ、この度『語用論研究』はオンラインジャーナルという新たな船出に漕ぎ出します。これまで『語用論研究』が培ってきた伝統に速報性という新たな武器が加わり、会員のみならず一層魅力的な学会誌となっていくことを祈念いたします。今後ともご支援、ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

(編集委員長・副会長 堀江薫)

★大会総務委員会プロシーディングス担当より

目下、大会総務委員会(プロシーディングス担当)では、2022年度第25回年次大会で発表された論文をとりまとめ、『大会発表論文集』(Proceedings)(第18号)(電子媒体のみの発行)を作成いたしております。ご提出いただきました原稿は、7月上旬頃に当学会ホームページ上に公開する予定です。

原稿をご提出いただいた会員の方々には、ご協力いただき誠にありがとうございます。

(八木橋宏勇)

《事務局より》

★会費納入のお願い

年会費は、一般会員6,000円、学生会員4,000円、団体会員7,000円です。よろしくお願い申し上げます。学会口座は以下のとおりです。

【郵便振替】

口座番号：00900-3-130378

口座名：日本語用論学会

【ゆうちょ銀行】

支店名：099

口座種類：当座

口座番号：130378

口座名：日本語用論学会

学会ホームページの「会員専用ページ」より、クレジットカード決済も可能です。会員ステータス、会費納入、会員専用ページへのログイン等に関するお問い合わせは、事務局ではなく、下記までお願いいたします。

日本語用論学会 会員管理室
E-mail: psj-at-outreach.jp

★令和3年以降の激甚災害ならびに新型コロナウイルスによる影響を受けられた皆様へ

日本語用論学会では、激甚災害に指定された豪雨の被害に遭われた会員の皆様に対し、お申し出いただくことにより「2023年度会費」ならびに「2023年度年次大会の参加費」を免除いたします。被災された皆様方の一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

また、「新型コロナウイルス感染症」の直接・間接的影響による著しい経済的な影響を被っている会員の皆様におかれましては、以下の連絡先にまずはご相談ください。

日本語用論学会事務局
〒560-0043
大阪府豊中市待兼山町1-8
大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻
秦かおり研究室内
E-mail: secretary-at-pragmatics.gr.jp
(事務局長・秦かおり)

★《新刊・近刊案内》★

■『[語用論の基礎を理解する 改訂版](#)』Gunter Senft (著) 石崎雅人・野呂幾久子 (訳) 開拓社

本書は、言語使用が持つ文化特有の形式を調べ、社会的行動としての言語の記述を目指す語用論について、その分野横断的な特徴に基づき、関連する様々な分野との接点を丁寧に論じながら包括的に説明する一冊である。1章から6章までの各章で、哲学、心理学、動物行動学、エスノグラフィー、社会学、政治学といった関連分野との繋がりに触れ、各分野によって導入された語用論の核となる先駆的な問題から、各領域の語用論における最新の展開までが網羅されている。この一冊で、文脈依存の言語と文化特有の言語使用形態を研究する



分野横断的な学問としての語用論の基礎を理解し、今後「解放的語用論」へと移行しつつある現在の潮流までを把握することができるため、これから語用論研究を始める学生や若手研究者のための入門書としてだけでなく、「語用論とは何か」を改めて問い直し新たな展開を模索するための参考書としても一読の価値がある。各章の最後には、理解と学習を促進するための課題と参考文献が提示されており、授業で語用論について教える際の教科書にも最適と言えるだろう。語用論に接点を持つあらゆる分野の研究者にお勧めの好著である。(2022.11.16刊)

■『[社会言語学の枠組み](#)』井上史雄・田邊和子(編) くらしお出版 (定価 2,200円+税)



本書は、初めて社会言語学を学ぶ読者を対象とした入門書として位置づけられる。全体的な視点から個別現象へと焦点を移していく流れで構成し、「ストーリー性」を持たせるといふ本書全体に関する工夫、また、図書館の配列、大学での授業での利用法、引用文献の

形式など細部に渡る工夫が施されているから、従来の概説書を超えた、より学びやすい書とすることができる。「変異」と「談話」を共通の軸とする10章の構成で、各章には最新情報も豊富に含まれている。従って、社会言語学を初めて学ぶ学生も、教員(研究者)も学ぶところの多い魅力的な一冊である。各章の中では、冒頭に「この章のポイント」、末尾に「推薦図書」と「調査の課題」が配置されており、最初に当該の章から何を学ぶべきなのか提示された後、最後にはさらに理解を深めるために自律的に研究し思考する機会が与えられる設計となっている。課題は、読者自身のことば遣いに関する経験を問うものが多く含まれており、読者は身近なところのことばの面白さに気づくことができるだろう。(2022.11.25刊)

- 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3』小川芳樹・中山俊秀(編) 開拓社(定価 7,200円+税)



本書は『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論』と題するシリーズの第3巻である。タイトルを見れば、通時的な言語変化や共時的な変異をコーパスのデータを基に論じていることは予測できるが、語用論との接点はなかなか想像し難いかもしれない。しかし、目次を見れば、言語の在り様を談話・機能の観点から論じる複数の論考も収められていることがすぐに分かる。語用論・認知言語学・社会言語学を理論的基盤とする言語変化、変異、逸脱といった言語のダイナミックな側面を知るには格好の1冊である。(2022.12.09刊)

■ 『語用論的方言学の方法』小林隆(著) ひつじ書房(定価 8,800円+税)

本書は、方言学の立場から、言語行動の地域的変異を定量的・定性的に明らかにした書である。本書の独自性は、言語の運用面の記述を通じて、言葉に対する話し手の好み・規範意識の地域的な差異を明らかにしようとするところにある。本論では、議論の中心となる「言語的発想法」の枠組みと、全国で収集された場面設定会話などの詳細が示されたのち、挨拶、儀礼会話、依頼・受託、オノマトペ・感動詞などの領域で、どのような方言間の差異があるかが明らかにされる。例えば、弔問の会話において、東北地方では、心情的・主観的な感情の吐露が顕著に見られるのに対し、近畿地方ではより儀礼的・定型的な表現が多く見られるという点など、各方言の運用のリアリティに迫る知見は枚挙に暇がない。また自己と話し手の一体化/分化、自己と他者の分離、現場的リアリティの言語などの理論的概念も興味深い。本書は、方言研究や語用論のみならず、認知言語学、社会言語学、言語人類学、レトリック研究、異文化理解の分野へのインパクトも期待される意欲的な書である。(2023.2.22刊)



- 『優しいコミュニケーション-「思いやり」の言語学』村田和代(著) 岩波新書(定価 940円+税)



本書は、日常の会話、ビジネス会議やオンラインの話し合い、リスクコミュニケーションを、社会言語学の視点から具体的に分析することによって、コミュニケーションを成り立たせる条件を可視化し、誰も排除しない社会に向けた「人に優しい話し方・聞き方」を追求するものである。著者の村田和代氏がこれまで

行ってきた社会言語学的研究を「優しいコミュニケーション」という観点から切り取り分析している。新書であることもあって(あるいはこの書籍のテーマに即して?)、全体的に非常に平易な日本語で書かれているが、たとえば1章では社会言語学、特にコミュニケーションを学ぶ時の理論的背景や調査方法について、また分析にあたっての視点などを例を挙げながらわかりやすく説明している。かなり簡素化されているとはいえ、内容理解を促す非常に丁寧な筆致であり、専門分野の研究者というよりは、これからこの分野を目指す学部制・大学院生、あるいは一般の方にも有益な一冊となっている。(2023.4.30刊)

- 『イン/ポライトネス- からまる善意と悪意』滝浦真人・椎名美智(編) ひつじ書房(定価 3,400円+税)



ポライトネスに関する研究は数あれど、インポライトネスにここまで着目した著書はそうはないだろう。本書では、「ポライトな言葉は予定的に調和するが、インポライトなそれは隠微に絡み合う」として、インポライトな言葉を隠微なものとして扱う。それは分析のし甲斐があるというものである。ポライトネスの研究がわれわれの世界を席卷していた裏で、当然インポライトネスも昔から実際のコミュニケーションの場では存在していたが、学問上は、21世紀以降、

インポライトネスが着目されたといっている。そのように比較的新しい学問分野としてインポライトネスを捉え、示唆を与える一冊である。具体的には7本の論文が収められている。漱石作品やママ友のバトルを解剖し、悪態・毒舌・ディスリを剔抉、善意が悪意に転じる契機を捉え、「からまりあう善意と悪意」を紐解いていく。(2023.4.24刊)

■『ミステリードラマの日本語--発話と記号の演出を探る』泉子・K・メイナード(著) くらしお出版(定価 5,400 円+税)



本書は日本のポピュラーカルチャーの一つであるミステリードラマをデータに、そこで用いられる発話と記号の演出について分析し、大衆的な娯楽・芸術作品としての日本語、消費する商品としての日本語のコミュニケーションの実情を考察するものである。本書は、

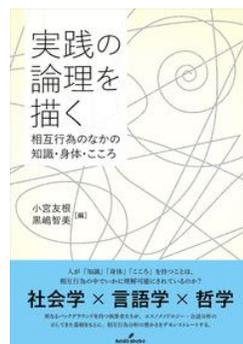
全4部11章で構成され、その中で日本のミステリードラマに見られる多様な表現・記号現象(表現者の演出意図にかかるモダリティ、キャラクター・スピーク、ビジュアル記号としての文字テロップ、など)について、語用論はもちろん、談話分析、会話分析、社会言語学、記号論、日本語教育など様々な視点からアプローチすることで、多角的な分析と考察が行われている。ミステリードラマという限られたジャンルを対象としながら、日本語を巡るあらゆる側面に有益な知見を提供する内容に、筆者の類稀な研究力が窺える一冊となっている。誰もが手軽にアクセスできるメディアで公開されたエンターテインメント作品の分析手法やデータの表記法は、これから同分野での研究を始めようとする研究者には良い参考となるだろう。本書を通して、日本のポピュラーカルチャーが今後の語用論や談話分析研究に新たな展開をもたらす重要なリソースとして改めて注目を集めることが期待される。

(2023.3.24刊)

■『実践の論理を描く：相互行為のなかの知識・身体・こころ』小宮友根・黒嶋智美(編) 勁草書房(定価 3,800 円+税)

エスノメソドロジー・会話分析(EMCA)という研究分野への関心は本学会の中でも近年ますます高まっているが、EMCAを学ぼうとする人で西阪仰氏の名前を目にしたことがないという人はいないだろう。その西阪氏が2023年3月に千

葉大学を定年退職するに際して編まれた論文集が本書である。本書は「相互行為のなかの知識」



「相互行為のなかの身体」「相互行為のなかのこころ」の3つのセクションから構成され、全15篇の論考が掲載されている。各セクションの末尾には、言語学・哲学・社会学という伝統的分野とEMCAの関係性や差異について解説するコラムが用意さ

れており、読者の俯瞰的な理解を助けてくれる。こうしたコラムの存在からも示唆されるように、EMCAという分野は(特に言語学を始めとする伝統的な学問分野に慣れ親しんだ立場からは)理解が容易ではない側面があるかもしれない。「実践」も「論理」も平易な語彙だが、本書のタイトルにある「実践の論理」とは何のことなのか、それを「描く」とはどのような営みなのか。本書の序論ではそれらの点が丁寧に紐解かれており、またそれに続く15篇の論考は、実践の論理を描くやり方を具体的に示してくれている。その意味で、EMCAに入門するための一冊として読むこともできるだろう。(2023.4.1刊)

★広報委員会からのお知らせ

会員諸氏に広くお知らせしたいと思いますので、語用論関連の新刊書・近刊書の情報があれば広報委員会宛にお寄せください。ご自身の著作はもちろん、恩師・同僚・友人・指導学生の出版物、比較的目にとまりにくい日英語以外での出版物なども歓迎します。なお、紹介文は出版社によるものを利用するほか、広報委員が執筆を担当しています。

PSJ members selected this section's recently-published and forthcoming books on pragmatics. We invite you to introduce books you recently published or highly recommend, to fellow members. Little-known books, and books written in your native language are especially welcome.

～編集後記～

■ コロナも5類となり世の中はすっかりポストコロナ気分です。個人的には、コロナが収束してもコロナ前に戻るのではなく、コロナ禍で得た学びや負の遺産、そして数は少ないかもしれませんが恩恵を、コロナ後の世界に持ち込むのだと思っていました。しかし蓋を開けてみればあの3年間は何だったのか、というくらいびっく

りするほどコロナ前に戻っており、私たちはコロナで何を得たのだろう、ということをもう一度深く見つめ直したくなっています。そんな中でも Zoom の普及により数々の会議がオンラインになったことで日々楽ができていいるなあと、ちょっとした「恩恵」に口角が上がる日々です。

(秦かおり)

■ AI 技術がメディアなどで取り上げられることが多くなったような、もしくは、自分の興味関心がこれまでよりも増したような気がします。職場でも、教員同士で、学生の授業の成果物への AI 技術の利用とその対応について話すことがあります。コロナ禍では、オンライン授業における教育の改善が課題だったのに、また次なる課題が押し寄せてきて、心休まることがないなあと感じるがあります。パンデミックで得たものがあったのと同じように、新たな課題からもよい学びがたくさんあるよう、頑張りたいと思います。(野村佑子)

~~~~~

日本語用論学会 Newsletter 第 49 号

発行：日本語用論学会広報委員会

発行日：2023 年 6 月 1 日

[広報委員会]

\* 委員長：秦かおり

\* Newsletter 編集担当：野村佑子

\* 公式ホームページ担当：

横森大輔・名塩征史

\* 会員メーリングリスト担当：

八木橋宏勇・木本幸憲

E-mail: [webmaster-at-pragmatics.gr.jp](mailto:webmaster-at-pragmatics.gr.jp)